

英語

I

■出題のねらい

日常的な会話の内容を正確に理解する力を問う問題です。2人のやりとりを見失わないようにしながら、細かい情報を読み取りましょう。空所補充問題は、空所の後の会話をしっかり読みながら、文脈に合う選択肢を選ぶ必要があります。内容読解問題は、話者が2人いるので、どちらの人物について当てはまる内容なのか、それとも両方の人物について当てはまる内容なのかにも注意しながら読み進めると、正答にたどり着けるはずです。

■採点講評

3 は8割半ば、2 は7割、4 は6割、1 は5割の正答率でした。1 に関しては文法問題となっており、Did you～と過去形になっているので、過去形を選びます。現在完了の④を選んだ受験生が2割、現在形・原形の①を選んだ受験生が2割いましたので、細かな文法にも普段から気を遣うようにしましょう。5 は正答率が1割とかなり低かったです。正答の②は、「Hina と Ren が教師に影響を与えた」の意味になります。本文では「教員が二人に影響を与えた」という内容ですから、関係性が逆になっているため本文の内容に合わない選択肢となります。しっかりと英文の意味をとらえましょう。指示文を読み飛ばしてしまい「内容に合う」選択肢を選んだ受験生がいたのかもしれませんが、その場合はしっかりと指示文を読むようにしましょう。

II

■出題のねらい

近年のSDGsの取組みとも合致した、とある大学のプラスチック削減への取組みに関する案内を読み、ポイントとなる情報を的確に読み取る力を問う問題です。背景にある環境問題、プラスチックボトルの代替としてこの大学では何を使用するのか、その他の環境問題への取組みなど、様々な情報があります。環境問題への取組みに普段から意識していると、わからない単語があったとしても推測がしやすくなるので、さらに問題が解きやすくなります。

■採点講評

いずれの問題も7～8割の正答率でしたので、たいへんよくできていました。SDGsに関しては近年取り上げられることが多く、またその中でもプラスチック問題に関する取組みをテーマとしていましたので、受験生にも馴染み深かったと思います。誤りの選択肢を選んだ率が高かったものを強いて挙げると、8 の③と10 の③が、2割弱でした。英文を落ち着いて丁寧に読むようにしましょう。

III

■出題のねらい

英語の基本構文・基本熟語の知識を問う問題です。構文や熟語の知識は、英文法の知識とも関連し、英文読解の基礎でもあります。「なんとなく」ではなく、自信をもって正答を選択できるかが重要です。

■採点講評

(1)の問題形式(11～13)は、いずれも正答率が6割～8割と高かったです。一方で、(2)の問題形式では、もっとも正答率が高かった16でも4割半ばと、5割に満たなかったです。14、15、17はいずれも3割程度の正答率でした。構文や熟語を覚えるのは大変ですが、コツコツと覚えていくようにしましょう。

IV

■出題のねらい

近年のおにぎりブームにおける、おにぎりの小売業に関する英文です。英文は比較的短く、話題も身近であるため、読み進めやすいのではないのでしょうか。ただ、発言の引用が多く、おにぎり専門店や各コンビニチェーンの担当者の発言が前後しているのに加え、各チェーンのおにぎりの特徴が各所に散りばめられているため、内容をしっかりと整理しながら読解していく必要があります。接続詞や副詞の意味にも気をつけましょう。

■採点講評

一番低い正答率の問題でも18と22の4割程度でした。その他は5割程度以上の正答率でしたので、全体としてしっかりと内容を把握しながら読み進められた受験生が多かったです。おにぎり、コンビニというかなり身近なテーマであったことが、その大きな要因かと思えます。特に選択肢が日本語になっている問題の正答率は概ね高く、23は9割以上の正答率でした。一方で18、20、22の選択肢は英語でしたが、誤りの選択肢もそれなりに選ばれていました。選択肢が英語の場合の問題は難易度が高くなりますが、ぜひ克服して正答率UPを目指しましょう。

V

■出題のねらい

インドでのトラの個体数増加に関する研究についての英文です。トラの生息地近くの地域社会の経済状況を改善する取組みが、トラの個体数回復に貢献するという新しい研究結果に基づいており、一般的な知識に頼っているだけでは正答にたどり着けません。研究チームの研究内容や、そのチーム内の研究者、そのチームには入っていない別の研究者、特定の組織など、誰がどんなことを述べているのかを正確に読み分け、整理する力が必要です。

■採点講評

各問の正答の並び替えは以下となります。

29 is home to about 75 percent

30 wildlife protection can help both

31 What the research shows is

30、31 および読解問題である 32 の正答率は5～6割でしたので、まずまずの正答率でした。しかし 29 は正答率が1割未満とA日程2日目全体を通して極端に低かったため、多くの受験生がbe home toという表現を知らなかった可能性が高いです。②のincreasedが正答の選択肢（並び替えた際に不必要なもの）でしたが、本文の内容的に使われそうな単語であったために選んでしまった受験生が多かったようです。こうした引っかけに惑わされないように正答を導き出しましょう。